

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 崎濱紗奈

崎濱紗奈氏の論文『伊波普猷の「日琉同祖論」——「政治神学」から「政治」へ』は、沖縄学の定礎者として知られる伊波普猷の「日琉同祖論」の新たな解釈を提示し、それを通して、沖縄近現代思想史上最大のテーマである「主体」の問題を再考しようとする試みである。崎濱氏によれば、沖縄において「主体」の問題は従来つねに日本に対する同化か異化かという形で問われ、伊波普猷研究もこの文脈に規定されてきた。伊波の日琉同祖論も、帝国日本の同化政策を正当化する言説として批判されるか、「沖縄」という主体を「日本」から異化し、帝国への抵抗を可能とするための戦略的言説として擁護されるかのいずれかであった。これに対して崎濱氏は、伊波も初期には戦略的日琉同祖論により同化に対抗しようとしたが、1920年代の「蘇鉄地獄」の衝撃を経て、限界を自覚し、本格的な『おもろさうし』研究を通して、「原日本」＝「原沖縄」という新たな日琉同祖論を構築するに至ったと論じる。しかし崎濱氏によれば、この後期日琉同祖論は日本と沖縄の二項対立を克服することには成功したものの、権力関係としての「政治」なき絶対平等の共同体を仮構する「政治神学」と化している点に限界をもつ。崎濱氏は、この政治神学自体、伊波のテキストの中でつねにすでに脱構築されていることを指摘し、そこから「政治」の新たな形と、それを担う「主体」の在り方を導出してみせる。

まず序章では、沖縄近現代思想史における「主体」の論じ方について、現代の基地問題をめぐる論争状況まで含めて先行研究が批判的に検討され、「主体」を批判しつつ「主体」を諦めないことはいかにして可能か、という根本的な問いが提起される。

第1章では、1910年代の伊波普猷のテキストの分析を通して、後期日琉同祖論と対比される初期日琉同祖論の特徴が明らかにされる。それは基本的に、「沖縄」という「個性」を帝国内部に配置しようとする試みであり、従来の伊波普猷読解の枠内に収まるものであることが確認される。

第2章では、伊波に発想の転換を促す契機となった蘇鉄地獄と、その経済危機の中で沖縄が置かれた状況が、植民地とも内国植民地とも異なる「辺境」という概念を手がかりに分析される。ここで明らかになるのは、「沖縄人」という主体が、帝国日本の学知による人種化に重ねて、資本主義というシステムの中で再人種化されるプロセスである。

第3章では、蘇鉄地獄を引き起こした資本主義の諸問題の解決策を模索する伊波が、柳田國男の影響下で「郷土論的転回」を果たしていく経緯を明らかにする。崎濱氏によれば、伊波は天皇に象徴される神的・政治的権力を搾取の根源と捉え、その支配隷属関係すなわち「政治」の延長上に資本主義が発生すると考え、これを「悪」とみなした。そしてこれに対して、『おもろさうし』を始めとする琉球の古代歌謡の中に、搾取の根源となりえない「善」

なる神と、その神のもとに実現される絶対的平等の担保された共同体「まきよ」を見出す。

第4章では、伊波が「海部」＝「アマミキヨ」という集団を基軸に据え、「原日本」＝「原沖縄」としての後期日琉同祖論を練り上げる過程を明らかにする。崎濱氏によれば、伊波は「海部」＝「アマミキヨ」＝善、「天孫」＝悪と位置づけ、前者の善なる共同体は後者が「政治」という悪を持ち込んだために崩壊した、と考えた。「天孫」に追われた「海部」は南へ移動し、「アマミキヨ」として琉球民族の祖先となる。これにより「善」なる共同体「原日本」が沖縄に移植され、「原沖縄」が形成される。こうして伊波は、「天孫」の記紀神話によって隠蔽・抹消されてしまった「海部」＝「アマミキヨ」の神話を起点として、日本そのもののあり方を根底から変革しようとした、と崎濱氏は論じる。

第5章では、伊波が「原日本」＝「原沖縄」の共同体を、「真（だに）の神」の下での「政治」なき絶対平等の共同体という政治神学として構想していることを確認し、同時に伊波自身のテキストの中に、そうした理想の共同体を不可能にする契機が含まれていることを明らかにする。伊波は柳田國男と折口信夫の「神」観念を融合させ、「来訪する祖先神」という新たな神として「ニライカナイ」の神を構想したが、その神が共同体にもたらず「稲」は、元来「善」とも「悪」とも言えず両義的であり、「稲」を核心とする権力関係としての「政治」の根は抹消不可能である、と崎濱氏は論じる。

終章では、政治哲学者ジャック・ランシエールの「不和」としての「政治」の概念を参照しつつ、伊波普猷の後期日琉同祖論がその試みと限界とによって、「現行秩序に裂け目を刻み込む力」としての「政治」と、その力を担う「主体」の動詞的な在り方を示唆することが結論される。

以上のように、本論文において崎濱氏は、沖縄近代思想史上の巨人である伊波普猷の全テキストに通暁しつつ、先行研究が自明の前提としてきた枠組みを根底から問い直し、日琉同祖論についての独創的な解釈を展開するとともに、そこからさらに「沖縄」の政治的「主体」化をめぐる現代の論争にも参入するというスリリングな知的挑戦を見事に実践している。後期日琉同祖論は天皇制国家とは別の日本の構想であったとする解釈、近年大きな論争となった伊波の「決戦場・沖縄本島」についての独自の解釈を含め、沖縄近現代思想史研究に寄与する多くの論点を博士論文にふさわしい水準で提起している点で高い評価に値する。審査委員からは、伊波のテキストの丁寧な読解と「政治」および「主体」に関する思想的議論との接続がやや分かりにくい、伊波の「起源への欲望」に関してより深めた考察が欲しい、特定の資料の解釈についてより強い説得力が必要、等々の指摘がなされたが、これらは本論文の学術的な価値をいささかも損なうものではなく、今後の課題とすべきことが確認された。

したがって、本審査委員会は、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。